

# インド・コルカタにてインド舞踊公演会、

## ハードな9日間の旅を振り返って！

－ 若林 眞美子

去る2018年12月8日から16日までの9日間インド・コルカタからアーメダバードまでのハードな旅をしました。その中2018年12月10日 私達インド舞踊の仲間7名で、アノドニケトンは、コルカタで全3時間の公演会を致しました。

アノドニケトンは、三島、沼津市 富士市在住のインド舞踊仲間で、沼津在住の石井シュクリシュナ先生が、20年以上インド舞踊を通じて、家族のような仲間になっており、日々の練習もさることながら、熱心な先生のご指導のもと、みんな練習に練習を重ね、7年前の公演会より、さらに濃密な後援会ができたこと、懐かしい方々との再会が大きな喜びになっています。今回の公演会にあたり、場所の確保が困難をきたし、先生、インドのご家族の方々には、大変ご心配おかけし、お骨折りいただきました。弟様には特に、手続き等に奔走頂いたことは、誠に申し訳なく感謝に絶えません。

また、公演会会場に着くや否や早くから大きな看板が道路に堂々と立っていたのも感激ひとしおでした。

私達が踊る舞台の前には たくさんのお客様をご観覧ください、舞台後ろ側には、有名・著名な演奏家の方々の温かい眼差しの応援があり、この公演会の誇り高さ豪華さが漂っておりました。舞台進行と共に私たちは、

第1部自然; オープニングダンスから早替え(暗い舞台袖で着替)をしながら、

次々と4曲おどり

第2部恋、色々の情景、祈りなどの設定 全11曲を夢中かつ優雅におどりこなし、

絶賛の声を聴きました。

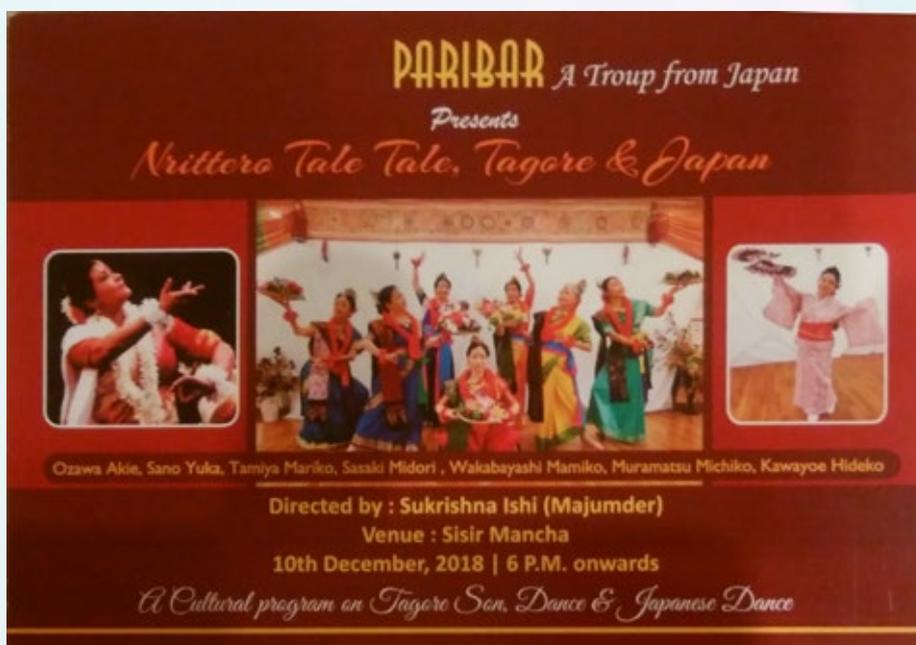
その後 先生の弟様はじめ、すばらしいプロ歌手、演奏家の出演応援がありました。

続いて 第3部 日本舞踊3曲(松の緑・お祝いの踊り、滑稽な・おてもやん、16歳の琴演奏にイメージした・晒し踊り)を披露し、アンコールの声を聞きながら夜遅く幕を引きました。

この最後の晒しの踊りは、仲間が図書館で借りてきてくれた琴の演奏を聴いてイメージが沸き、器用な彼女が晒しを うちわと透き通るような布で7名分を作成してくれ、衣装も浴衣にブルーのズボン(インド舞踊仲間で作成してくれた器用な方あり) 足袋にブルーの鼻緒を縫い付け草履風に工夫を凝らし、沖縄風に襷(たすき)や頭に巻く帯のようなスカーフなど、フィナーレを飾るに相応しい衣装に仕上げたと思っています。振付は、波をイメージし、舞台構成にも現代風エグザイル風に動きをとってみました。この踊りは、振付もなく、私の苦心作でした。インドでスモークを焚いてこの踊りの雰囲気を作ってくださった舞台照明の方々に驚きと感激は、日本に帰ってから じわじわとDVDをみながら感じ取ったような訳でした。遅まきながら感激と感謝を振り返って永く感動しております。

今回の日本舞踊は、特に70歳過ぎた私にとって元気の塊魂を象徴すべき物になりました。

日本舞踊は、幼少3歳から長い間自分の体作りに続けていただけでしたし、師範をするつもりもなくおりましたので、シュクリシュナ先生から、「インドで是非に日本舞踊を披露してください」と依頼されました時は、正直自信がありませんでした。インド舞踊の仲間がその意欲を支えてくれました。正統派の踊り、滑稽な踊り、琴に合わせて波を現代風に踊りたいと私のイメージ通りに仲間が熱心に練習し、慣れない日本舞踊によく挑戦してくれたと感激でしたが、20年以上インド舞踊で鍛えた踊りの表現や身のこなしは相通じるものがあり、舞踊をやっている人の強みだと練習する度に感じました。扇をもった手、表現力豊かさは、インド舞踊で培った表現力の賜物だと思いました。舞踊は命ある限り続けて行きたいと思いました。 ■



# すばらしいインドの手工芸

— 矢部 正江

コルカタ出身のシュクリシュナさんと初めて出会ったのは、20年程前の地元の国際交流のイベントだった。

その時シュクリシュナさんはインド文化の紹介で、タゴールダンスを踊っていた。しばらくして直接お話する機会があり、もともと美術大学で染織を専攻していた私は、インドの染織や刺繍にとっても興味があることを話すと、今度インド刺繍の教室を開くのでよかったらとお誘いを受けた。ちょうど子供にも手がかからなくなってきた頃で、是非にと教えてもらうことになった。

インド刺繍といわれて私たち日本人がまず思い浮かべるのは、鮮やかな色合いでミラーの入ったキラキラ光るゴージャスなものだと思う。だけど東インドのベンガル地方の刺繍はそうではなかった。もっとシンプルなカンタステッチ。技法的にはフランス刺繍に近く、学び始めるには入りやすい。では、どこがインド的かというと、シュクリシュナさんが描くデザインと色合わせ。特に色合わせに関しては、たぶん日本人の感覚ではちょっと考えられない感じだった。デザインをまえにして選び出されたいくつかの刺繍糸を見て、どうしてもイメージがわかなかった。地味な色合いがどちらかというと好みな私なので、特にそう感じるのかなとも思ったけれど、みんなも同じことを言っていたので、やっぱり日本人の感覚とは違っているものだったと思う。この配色でどうなるだろうと思うていると、出来上がった刺繍布を見ると、意外とちゃんとしっくりとしていて不思議だった。やがて私たちもインドの色合いにも慣れ、シュクリシュナさんも日本の色合いに慣れ、みんなの好みを把握されて、私たちの作るインド刺繍の作品は、どちらかというと落ち着いた色合いのものになっているかもしれない。今はカンタステッチだけでなく、ミラーワークやインド各地のステッチもいろいろ教えてもらい、作品作りを楽しんでいる。

もう何年も前になるのだけれど、シュクリシュナさんが、自分がインドから持ってきたサリーがたくさんあって、このまま箆箆にしまっておくのはもったいないので、日本のみんなに見てもらいたいけれど、どこか展示できるようなところはないかなと話していた。その時私の頭にぱっと思い浮かんだのは、地元沼津の街中にある沼津信用金庫のストリートギャラリー。歩道に面した建物の北側がずっとウィンドーギャラリーになっていて、1ヶ月ごとに作家さんの作品を展示していた。デパートのショーウィンドーのようにサリーを飾れたら、とても映えてそれはそれはすばらしいだろうと思った。そしてなにより自分がシュクリシュナさんのサリーを見たかった。

しかし残念ながら伝手があるわけではなく私の夢だけで終わっていたのが、数年後運よくギャラリーの担当の方とお話する機会に恵まれた。シュクリシュナさんのことは人伝ですでに知っておられて、本当にいいのかと思うくらい話を進めていただいた。

そして「インドの染織展 サリーとインドの手仕事の魅力」という形で展示をさせてもらえることになった。

すでに向こう1年間のスケジュールが組まれていたため、展示は次の年の8月ということで準備が始まった。インドを大まかに東西南北に分けて、それぞれの地方の染織という形で展示することに決め、シュクリシュナさんのサリーを中心に展示するものを選んだ。シュクリシュナさんはコルカタの出身で東インドのサリーが多かったため、何度もインドを旅し、西インドの染織、刺繍布に造詣の深いタゴールダンスの生徒さんのコレクションからも出してもらったり、少なからず私のコレクションからも展示させてもらった。建物の出入り口を挟んだ隣には、小さめながらインド刺繍教室の生徒の作品を展示するスペースもいただいた。

そして刺繍教室のみなさん、タゴールダンス教室のみなさんのお手伝いをいただき、8月の展示を迎えることができた。絵画の展示が多いギャラリーに、サリーを着たトルソーや天井から掛けられたサリーは、いつもの感じとは違って、面白いものになったのではないと思う。ギャラリーは夜10時までライトアップされ、とてもきれいだった。

それぞれの布の説明まで用意することができなかったなど、準備不足のところもあったけれど、全体としてよい展示になったと満足している。そして沼津信用金庫さんのご厚意で、1日インド文化体験フェアも開催することができた。インド刺繍教室の生徒の作品展示やタゴールダンス、サリーの着付け体験やインド民族衣装のファッションショーなどを行い、盛況に終わることができ、皆さんに喜んでいただけた。

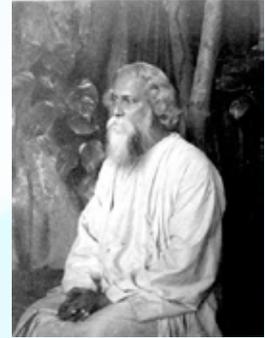
ストリートギャラリーの開催中は、何度か前を通ってみた。常にその場にいるわけではないので、どのくらいの人が足を止めて見てくれたのかわからないのが残念ではあったけれど、このようなすばらしい機会をいただき、たくさんの方々のお力に助けられて、インドの文化の紹介ができたこと大変感謝している。■



# 未読の手紙

- 奥田由香

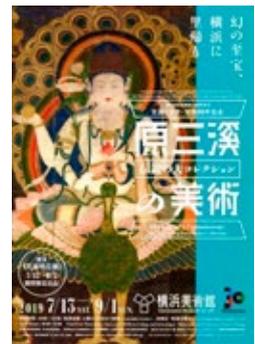
I woke up and found his letter with the morning.  
I do not know what it says, for I cannot read.  
I shall leave the wise man alone with his books, I shall not trouble him, for who knows if he can read what the letter says.  
Let me hold it to my forehead and press it to my heart.  
When the night grows still and stars come out one by one I will spread it on my lap and stay silent.  
The rustling leaves will read it aloud to me, the rushing stream will chant it, and the seven wise stars will sing it to me from the sky.  
I cannot find what I seek, I cannot understand what I would learn; but this unread letter has lightened my burdens and turned my thought into songs.  
-- "Fruits Gathering" by R.Tagore



目覚めると、朝を連れて一通の手紙が届いていた。  
何が書かれているのだろう、わたしには読み取れないな。  
けれど学者に頼るつもりもない、この手紙を解読できるとは思えないから。  
わたしは手紙を額に当てては、胸に押しつけてみたりもする。  
夜も更けて、一つ、また一つ星々の元で、膝にひろげて じっと待つ  
さらさらと囁く木の葉が読んでくれるだろう、河のせせらぎが唱えてくれるだろう。  
そして、七つの賢い星々が空から歌ってくれるに違いない。  
求めているのは何か、どこへ向かってゆくのか 解き明かすことはできないけれど、  
未読のこの手紙が わたしの心を和らげ、思いを歌にしてくれるのだ  
ー 『果実籠』 ラビンドラナート・タゴール

ダゴールの‘未読の手紙’は、何を伝えようとしているのでしょうか。読み取れはしませんが、心の重荷を軽くしてくれて、思いを歌にしてしまう、そのような手紙が、私たちの朝には届いていないと言い切れるでしょうか。ともすると、慌ただしい日常に追われ目に入らないか、或いは現実と切り離された世界の出来事のように、ぼんやりと境界線を引いてしまっているのかもしれない。

折しも、横浜美術館で開催された原三溪展を訪れた時のこと、その‘未読の手紙’らしきものはらりと舞い落ちるのを見た気がしたのです。それは、原三溪の「美術品のコレクター」「茶人」「アーティスト」「芸術家のパトロン」としての側面を紹介する展覧会でした。私にとって原三溪への関心は、ダゴールとの交流が原点であり、来日当時ダゴールが感銘を受けたという下村観山の『弱法師』を拝見できるという好機でした。ダゴールは盲目の俊徳丸を目の前にした時、この作品を譲ってはもらえないかと三溪に懇願したと聞きます。洛陽を拝む俊徳丸の心に映し出された光景には、音なき調べが静かに漂っているかのようで、ダゴールはもしかしたら、その掌の上に‘未読の手紙’を見たのかもしれない、などと想像が膨らんでくるのです。しかし、『弱法師』に強く惹かれたダゴールの願いとはいえ、三溪はこの画を頑として手放しはしませんでした。日本の美を守り、後世へ繋いでゆくという三溪の強い信念に、ダゴールもきっと圧倒されたことでしょう。そんなエピソードも実感できるのが、本物に触れる醍醐味ではないでしょうか。そしてまた、後世に残る芸術家を育てようと奮闘した原三溪という人は、美しいものを一人占めするのではなく、誰もが鑑賞できるようにと惜しげなく公開したという、その偉大なる人間性にも触れることができました。



『弱法師』 下村観山

ところで、その日私にとって‘未読の手紙’と思しきは、もう一つ別の、ささやかな一枚の画にありました。源実朝による日課観音の掛け軸。日課観音とは、写経をするように日課として描く観音さまのことだそうで、実朝の観音さまは、柔らかな息と迷いのない筆で、なんとも言えぬ温もりを滲ませていました。これは、三溪の長男、善一郎氏が急逝し、一週間後に開かれた哀悼の茶事の掛け軸でした。茶人である父、三溪の最高のもてなしに、客人は皆、哀しみの美学のようなものを感じたことでしょう。今、こうして拝している私にも、三溪の言葉に尽くせぬ祈りが伝わってくるようでした。そして、その喪失感を鎮めた実朝の日課観音から聞こえてくる声なき声は何なのだろうと、気づけば、その糸を探っているのです。



『日課観音』 源実朝

源実朝、鎌倉幕府第3大将軍、12歳で征夷大将軍に任ぜられた武士は、万葉集を愛誦する歌人だったと言われています。鎌倉幕府と言えば、安らぎとはほど遠い、流血の上に成り立っていた時代。そんな武士の世界において、歌を詠むということへの逆風は、いかほどであったか。生きとし生けるすべてのものを愛しんだ実朝の歌の根底に、孤独と悲劇の激流が蠢いていたであろうことを思えば、時空を超えて、あの日課観音の慈しみが聞こえてくるのは不思議ではないと思えてきたのです。その理由は、実朝と彼を支える最大の理解者であった葛山景倫（かざらやま かげとも）との美しき信頼関係からも、痛いほど伝わってきます。（以下、森本房子著『朱い雪』を参照）

実朝は、宋の国に渡り文物を学びたいと願っていましたが、将軍という地位に翻弄された末、その希望さえ最早消えかけようとしていました。そんな時、景倫が涙ながらに告げたのですー「実現させましょう。宋の国はおおらかで、和歌とは違うにしろ、詩歌を重んじ、絵画、物語など盛んで、それらの担い手は尊ばれております。・・・生きるこの意味や喜びが発見されるにちがいありませぬ。そして、上様の優しいお心は、悩み多くの人たちを慰め、励ますことができます。必ずや行き止まりの洞窟ではない世界が、開けるはずでございます」と。実朝はしばし沈黙の後、「そなたは余の光であった。常にそなただけが光であった」と。景倫に向けた柔らかな眼差しが目に浮かぶようです。そして、景倫はこう言いました「・・・心は一つ。ですが、それがしごときが光なのではありません。上様の生きとし生けるものすべてに注ぐ優しさこそが光です。その埋もれた光こそ、かかげようございます。・・・大好きな山や川や森や、そこに咲く花々や、鳥たちや動物たち。それらに包まれ囲まれて、いつかお話くださった林のなかの木漏れ日のきらめきのように、つつましくも、命のきらめく日々を待ちましょう」と。あゝ、そうであったか、日課観音のあの声は、光、生きとし生けるものすべてに注ぐ優しい光だったのだ！‘未読の手紙’が葉擦れの如くささやくのが聞こえる、古の哀しみにふれよ、その心を開けよ、と。

世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小舟の綱手かなしも 『金槐和歌集』より

出で去なば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春をわするな 『吾妻鏡』より

実朝の歌に溢れる世の無常や人々への哀れみ、平和の願いを、三溪は日課観音に聞いていたのではないのでしょうか。

三溪自身も画家であり、晩年には蓮をモチーフに美しい作品を残しています。空間と花の堺が溶け合い、言いしれぬ調べを奏でる蓮の池。美しきものは目に見えるものでも、解き明かされるものでもない、そこに流れる哀しみをただ聞くことだと、三溪の静かな情熱が私たちの「今」を引き寄せていると思いました。

「原三溪展」は、こうしてタゴールから三溪、そして実朝へ結ばれた結び目の感触を私に残してくれました。そして、‘未読の手紙’が心を和らげ、歌に変えてくれるというその歌に、再び新たな輝きを見いだせるような気がしてくるのでした。

অজানা সুর কে দিয়ে যায় কানে কানে,  
ভাবনা আমার যায় ভেসে যায় গানে গানে।

未知なる調べを 届けてゆくのは誰でしょう、耳元にそっと  
わたしの思いは 歌となり 流れゆく  
遙かな記憶のむこうに ゆれる影  
失われたヴィーナの哀しみに  
泣きながら 彷徨う調べ  
遠き春の縁の星を  
わたしの思いは 歌となり漂う  
ータゴールソング ■

# わっこひろば宙これから..

- 山田 さくら

わっこひろば宙の開園から10年が経とうとしています。

今も当初と同様、保育内容・季節の行事・イベント、そして宙を起ち上げた際の主旨、子ども達への自然体保育などにほとんど変化はありません。

毎年行っている一大イベント「千年の森」での野外料理や山歩きを7月に楽しんできました。



そのお陰か宙の子ども達は、戸外でも室内でも自分達でしかりと遊びを見つけられ、訪問者が来ても物怖じすることなく接している姿が見られます。数か月前、息子のインドの友人夫婦が宙に遊びに来てくれたのですが、子ども達はいつもと全く変わらない様子で接していました。

英語で話しかけられると「わかんない」とは言っていましたが.. すぐ近くにある神社の森を通して神社や畑へ行ったり、公園へ行けば北アルプスが一望出来たり、環境に恵まれた中で育っている宙の子ども達。幼児期の育ちがこれからの成長に大きな影響を与えていくとすれば、とても幸せな環境と言えるでしょう。

ただ..ここ長野の片田舎でも子ども達が元気に戸外で遊んでいる姿が見られたり声がしたりすることはほとんどないと言っても過言ではありません。もちろん宙の周りでも。

全国的に少子化が進み子ども達の人口減少が著しいこの国。幼児教育、学校教育の在り方、そして真の子育てを見直すべき時が矢のように過ぎていくのを懸念しています。

インドから帰国した時、日本の幼児保育のあり方に疑問を持ったからこそ起ち上げた「わっこひろば宙」。少しでも何か良い変化の兆しが見えるのなら嬉しいのですが..

あのね かあさん

あのね かあさん わたし とべたよ  
ピョーンと ひといき  
ヒマラヤまで

あのね かあさん わたし あったよ  
しろーい ズウに  
あのアスワッタのもりで

あのね かあさん わたし みつけたよ  
おいしーい みず  
あのネクターのうみで

あのね かあさん わたし おしゃべりしたよ  
かみさまたちと  
バンヤンのきのしたで

あのね かあさん わたし おどったよ  
かぜのように ひかりのように  
シバのおひぎで

あのね かあさん わたし かえるよ  
はじめもない おわりもない  
むげんのあなたに いだかれて

宙の子ども達が、この大町市から一望出来る北アルプスにいだかれて、すくすくと成長していくことを祈るだけです。 ■

